

同志社大学設立の淵源を巡る (1) 渋沢栄一と新島襄, 同志社

「同志社大学理工学部」の源流を訪ねて」に次いで、今回は同志社大学設立の淵源シリーズ第1回として渋沢栄一を取上げます。渋沢と新島襄との親交は、私立大学同志社設立の旨意に賛同した渋沢が六千円もの多額の寄付をし、自ら集めた三万一千円もの募金の管理者になった明治21年に始まります。そして新島が亡くなった後も同志社との関係は長く続きました。「明治の1円は現在の2万円くらいの重みがあった!？」と言われていました。次号は大隈重信を取上げます。ご期待ください。

史実に見る

渋沢栄一の「民の力」に思うこと

副学長・化学システム創成工学科 教授 塚越 一彦



私の渋沢に関する知識は、NHK大河ドラマ「青天を衝け」の主人公であり、2024年からの新1万円札の顔になることあたりにはじまる。大河ドラマで、その生い立ちや功績を知ることになった。様々な会社、経済団体の設立・経営に関わり、「日本資本主義の父」と称されている。資料を調べるうち、渋沢と新島、そして同志社との関係を知ることになった。渋沢は、同志社に多額の寄付をし、同志社で講演会も開催している。資料の一部を紹介する。

渋沢栄一と新島襄, 同志社

1888年(明治21年)、新島は、私立大学同志社の設立を掲げ、広く協力を呼びかけた。同年7月、大隈重信外務大臣官邸にて、新島を支援するための会合が開催される。渋沢は岩崎弥之助らとともに出席し、自ら寄付を行う。更に基金募集、管理にも尽力する(文献1)。

新島は、1890年(明治23年)1月23日、神奈川県大磯にてその生涯を閉じた。よって、二人の交流は3年足らずの短い期間にとどまるが、その間の書簡のやり取りは十数通に及んだ。渋沢は、新島永眠の直前に、大磯の新島をしばしば見舞うばかりではなく、東京から名医を招いている。その尽くし方は通り一遍のものではなかった。新島は、死のわずか2日前に、病床から告別の手紙を渋沢に送った。同志社に対する渋沢の好意に深く感謝し、自分の亡き後にも同志社のことを忘れないでくれと懇請している(文献2)。この時、渋沢49歳、新島46歳。

渋沢は、新島没後の同年春4月に、同志社を訪れ、講演した。新島が渋沢に話した道徳観に触れ、その内容に大いに共鳴していると語っている(文献3)。同志社では、同年7月に、西洋的自然科学の教育研究機関として日本のフロントランナーとなる「同志社ハリス理化学学校」(現「同志社大学ハリス理化学研究所」)が開校する。「理化学」に対する同志社の先駆的な動きは、渋沢の脳裏に留まったことであろう。27年の時を経て、渋沢は、1917年(大正6年)に、総代として現在の「理化学研究所」(国立研究開発法人)の設立を申請した。同志社の「ハリス理化学研究所」の初動が、渋沢を「理化学研究所」の設立申請に導く契機の一つになったと考えても不思議ではない。

渋沢は、1911年(明治44年)、1914年(大正3年)と同志社を

訪れ、大正3年には構内で記念写真をとっている。1923年(大正12年)には、「同志社名誉員」、「同志社校友」に推挙され、長く同志社との関係を持ち続けた。この時、渋沢85歳、新島没後36年。渋沢は、新島との約束を果たしつつ、1931年(昭和6年)91歳の生涯を閉じた。

二人が説く「民の力」

大河ドラマでは、吉沢亮が演じる渋沢が、時々、拳を突き上げ、叫んでいた。「民の力をみんなに見せてやんべえ!」。一方、新島は、『吾人は政府の手に於て設立したる大学の実に有益なるを疑はず、然れども人民の手に抛つて設立する大学の、実に大なる感化を国民に及ぼすことを信ず、其生徒の独自一己の気象を發揮し、自治自立の人民を養成するに至つては、是れ私立大学特性の長所たるを信ぜずんば非ず、』と、同志社大学設立の旨意に述べている。

渋沢と新島の二人は、官や政府の役割を認めたと、上、「民の力」の必要性を認識していた。「官」主導で、近代化を推し進めていた明治の時代に、「民の力」を説く彼らの信念に揺らぎは見られない。僭越だが、今の時代にあつてこそ、私も、民主主義、自由主義、資本主義が、より良いかたちで成熟していけば、将来、益々、「民の力」、大学においては「私立大学が果たす役割」の大切さが、是認されてくると思っている。しかし、二人は、明治の時代に、「民の力」の大きさと重要性を確信し、実行に移していった。日本の経済と教育を牽引し、日本の近代化に貢献した二人の共通点は、「民の力」を信じていたことにある。

再び「民の力」が問われている現代

渋沢と新島が、「官」主導の時代に、「民の力」で、経済と教育を動かすには、大変な労力を要したことと思う。その中で渋沢と新島は、大きな成果をなし得た。そこには、二人の秀でたリーダーシップがあつたことは、疑う余地がない。しかし、私は、「民の力」には、人間社会になくはならない決定的な『真理』があるがため、それらが成就したと思う。人が長い歴史の中で、作り上げ勝ち得たものといえる民主主義、自由主義、資本主義を、柔軟性を持って維持し、継続していくには、近代化が始まった明治から、現代、そして未来に続く「民の力」に潜む『真理』を忘れてはならない。

再び「民の力」が問われ、真に試される時代を迎えている。先述のように、大河ドラマでは、渋沢が、「民の力をみんなに見せてやんべえ!」と叫んでいた。ここでの「民の力」を「私立大学」に置き換えて、同じように声にする一私学があつてもいいのではないかと、勇気を出して、少し控えめに。

「21世紀、新しい時代に向けて、私学同志社の魅力と活力を、多くの皆様にご覧いただきましょう!」

渋沢栄一と新島襄の略歴は本誌19ページ<表紙の顔4人の紹介>をご参照ください。



預かっている多額の募金の運用、体調への気遣い、自身の近況を新島に伝える渋沢の書翰(1889年(明治22年)8月12日)同志社史資料センター所蔵

(文献1)「渋沢栄一伝記資料」第27巻p.9-17より一部抜粋
(文献2)「新島先生と渋沢栄一」(有賀鉄太郎) 新島研究第21号(1960年)p.16-19より一部抜粋
(文献3)「渋沢栄一伝記資料」第27巻p.33-35より一部抜粋